

簡単に

第7期生 氏田 宗利

もう、かっこつけるのはやめようと思う。最後なのだから（いや、最初なのだから？）。かっこいい文章ではなく、等身大の自分をストレートに、そして何より、シンプルに表現できる文章。そんな文章を書きたいと思う。これが、今の僕、小野ゼミの卒業を間近に控えた私、氏田宗利が思う、素直な気持ちだ。ふんだんな最上級表現とキザな言い回しを好み、大きな口を叩く傾向のある（あった？）僕が、こんな心境になったのは、きっと小野ゼミでの活動を通じて、「ありのままの自分」を見つめる機会を、数多くもらったからだろう。

「最強かつ最高のゼミ。」これがゼミ長就任時に、僕が掲げたスローガンだ。キザではないが、最上級表現はたっぷり使っている。ゼミの最初の1年間は本当に怒濤のように過ぎていった。「組織を動かすっていうのはこういうこと、組織の意思決定にはこんなプロセスを踏む必要がある。」そんなことを学んだと思う。

最終学年である4年。個人的には、この1年が一番成長できた、もしくは大人になった、そして充実した1年だったと思う。それはたぶん、小野ゼミで密度のギュッと濃い1年を駆け抜け、落ち着き、将来のことにも思いを馳せながら、自分の人生みたいなものを、少しはゆっくりと考えたからだろう。少しは周りにも目がいくようになったらうし、空気も読めるようになったと思う。

他人に無関心だった僕が、はじめて後輩をかわいいと思えたし、先輩を、さりげなくではあるが、しかし、しっかりと尊敬できるようにもなったと思う。「エグゼミ」という言葉からでは想像もできない、ゆったりした、充実した1年だったように思う。でもこれは、「エグゼミ」を体験してからでないと、体感しえない心地なのだろう。

小野ゼミのホームページの入会案内・よくある質問 Q&A のコーナーに、資格試験と対比した形でゼミの特徴を示したこんなフレーズがある。「資格試験のためのダブルスクールは、目に見える単一の目標の達成のために効率的に手引きしてくるのに対して、ゼミ活動というものは、大学の仲間と共に様々なことに取り組む紆余曲折として非効率とも映るプロセスのなかで、知らず知らずのうちに多面的な諸点で自己成長を遂げることができる。」きっとこれは真実なのだと思う。



グル学で同期生のグループワーク中の著者